

川村たかし研究：「山へ行く牛」の考察を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007865

川村 たかし 研究

——「山へ行く牛」の考察を中心に——

A Researching Takashi Kawamura
through Japanese Language Teaching Materials “Yama he iku Ushi”

大 塚 浩
Hiroshi OHTSUKA

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

はじめに

川村たかしの作品「山へ行く牛」は、昭和47年8月1日に「日本児童文学」8月号（盛光社）に発表した「山へいく牛」が初出である。さらに同年11月、「山へいく牛」を含む計八編と併せて収載された『偕成社の創作文学 山へいく牛』（偕成社）が、作品「山へいく牛」の初刊本となる。

小学校国語教科書教材としての「山へ行く牛」は、昭和52年度版『小学校国語・六年下』（学校図書株式会社）に収録されたものが緒である。教科書テキストとしての「山へ行く牛」は、初刊本である『偕成社の創作文学 山へいく牛』を底本とした上で、作者である川村たかし自身が一部修正を施したものであった。

小学校国語教科書における「山へ行く牛」は、昭和52年度版から平成10年度版まで小学校六年生用として長きに亘り連続掲載（学校図書株式会社）され続けた。その後、国語科の配当時数の削減により国語教科書教材から一時消えたが、平成17年度版より復活し現行の小学校国語教科書まで継続的に掲載が続いている。

川村たかしの「山へ行く牛」については、拙稿「国語教科書教材基礎論研究」において、「山へ行く牛」の成立過程、作品「山へいく牛」と時代性、「好きで行くのやないよってに」と「好きで行くのやない」、鳥子の言葉と父の言葉の重なりについて考察してきている。¹⁾

本稿では、「川村たかし研究」の一環として「山へ行く牛」の考究を通し、峠の上での引き渡し、母牛との別れ、母牛の涙と鳥子の後悔、鳥子の躊躇いについて考察を進めていくものとする。

I. 峠の上での引き渡し

（1）峠の上の待ち合わせ

子牛が元服式を終えた翌日、母牛のおけかぶりは翌年の春までの間、山の村へ働きに出ることが決まっていた。今春から牛の親子の世話係を務めてきた小学校四年生の鳥子は、母牛の山行きのため置いてきぼりにされる子牛の守りをするのは不憫でたまらないという理由で、母牛を山へ送っていく役を買って出る。

本文では、牛の送り手と迎え手が合流する峠の上の待ち合わせ場所の様子について、次のように記している。²⁾

とうげの上には、山の村から、むかえが来ていた。ここで引きわたすのが、毎年の習慣なのだ。顔見知りの相手を見つけると、男も女も、やたら大きな声を出した。

北村のおじさんは、まず「おけかぶり」を見つけ、そばにぐったりとしゃがんでいるもんぺすがたの島子を見つけた。島子は、しっかりとたづなをにぎったまま、牛のかげで、両手の中に顔をはさんでいた。

島子は、母牛を送るために「十キロ近くもの山道」を、誰の力も借りずに独力で登ってきた。まだ9～10歳の島子にとって今回の道行きは、かなり厳しく、しんどいものであったのであろう。島子は、母牛の体がつくる僅かな蔭を見つけて自らの身を置き、疲労困憊のため「両手の中に顔を挟ん」だ姿勢で「ぐったりとしゃんで」いる。こうした状況の中であっても島子は、「しっかりと」母牛の「たづなをにぎったまま」、決して放そうとはしていない。

迎え手である北村は、最大の関心事である、冬の間の働き手である「おけかぶり」の存在を第一に確認している。山の村の人々は、重い材木の運び出しの担い手である牛の到着を心待ちにしていたのである。

(2) 北村と島子

二年ぶりに再会した島子は、北村に対し二年前の秋とは異なり、今年は自分一人で来たことを話す。

本文では、この場面の二人の会話について、次のように記している。³⁾

「父ちゃんが兵隊さんになったんで、うちが来たよ。」

「いや、ご苦労はん。それにしても、こいつはちょっとやせたかのう。もっとも、去年は腹に子供がいたで、じっぱり太かったがよ。」

「ほんまはね、冬の間ゆっくり休ませたかったんよ。」

北村さんは、困ったようにきょときょとした。

「分かった。大事にして、春にはうんと太らせとくでしょう。」

島子の父が召集されて出征したため、島子一人で峠の上まで牛を送りに来たことを話しても、北村の対応は、「いや、ご苦労はん。」の一言で素っ気ない。間髪を入れず北村は、「それにしても、こいつはちょっとやせたかのう。」と言って、会話の力点を牛に向けている。

北村にとっては、一年ぶりのおけかぶりとの再会ではあるが、牛の体調を見極める北村の観察眼は鋭い。春までの間、山の村に貸し出される牛には、寒冷期の山で重い材木を運び出す重労働が待っており、牛を迎え入れる北村にとっておけかぶりの体調不良は、自分自身の生活に関わる死活問題だからである。この時点での、おけかぶりの体調不良に関する島子と北村の見立ては、一致している。

しかし、島子の「ほんまはね、冬の間ゆっくり休ませたかったんよ。」という発言を聞いた北村は、「きょときょ」と困惑し出すのである。北村の目にも、痩せて疲労しているおけかぶりの姿は明らかである。だからといって、おけかぶりの体調に配慮して、冬の山仕事を免除して休養に充てさせる余裕は無い。多少痩せてしまっただけではいるが、しっかりと冬の山仕事に従事してもらわなくては困るという北村の本音が、「分かった。大事にして、春にはうんと太らせとくでしょう。」という建前の返事からも垣間見ることができよう。

(3) 毅然とする島子

島子と北村は、再会の挨拶を終えると、峠上の食堂へと向かった。本文では、次のように記している。⁴⁾

牛を木につないでしまうと、北村さんは、島子をかかえるようにして、食堂へ入った。中はごった返していた。

「さあ、ほしいものを注文せえよ。何でもおっちゃんがごちそうしたる。」

もう、送ってきた者も、むかえに来た者も、コップ酒を手にはしていた。島子は、小さい声で、

「うち、お金持ってるえ。」

と答えた。

「そうか、そうか。けど、まあええ。おっちゃんが、牛を連れてきてくれたほうびに、おごたげる。」

島子は、十キロ近くもの山道を独力で峠の上まで登り切り、疲労困憊でしゃがみ込んでいる最中でも、おけかぶりの手綱をしっかりと握り、決して自分の手から離すことはなかった。北村は、「牛を木につないでしまう」ことにより、これまで島子の手にとしっかりと握られていたおけかぶりの手綱を離させることに成功しているのである。

また、「背の高い」北村は、島子を背後から「かかえるようにして」食堂の中に導いている。おそらくこの時、木に繋がれた母牛の姿は、島子がいくら振り返って見ようとしても、北村の姿の蔭となり見ることが出来ないのである。つまり北村が、島子を後ろから「かかえるようにして」食堂に導き入れたことも、島子の関心を母牛の元に留め置かず、島子の気持ちを母牛から離したいがためなのである。

北村の「さあ、ほしいものを注文せえよ。何でもおっちゃんがごちそうしたる。」という発言は、大人びた言葉を発して母牛の冬の労働に懸念を抱いている島子に対し、駄々をこねる子供を相手に機嫌を取り、話をはぐらかそうとするかのようにも受け取れる。その上で北村は、島子の気持ちを母牛から遠ざけるために、ご馳走する食事の献立に向けさせようとしている。

しかし島子は、こうした北村の戦略を察知している。島子は、北村の「何でもおっちゃんがごちそうしたる」という甘言に対し、「うち、お金持ってるえ。」という毅然とした言葉で返答をしているのである。島子は、北村に対し、ご馳走になる理由がない、そのようなことでは誤魔化されないという強い意志をしっかりと伝えているのである。

Ⅱ. 母牛との別れ

(1) 鼻面を押しつけた母牛

峠上の食堂で、親子どんぶりの味も変わってしまったことを実感した島子は、店を出て母牛の元へと戻る。

本文では、食事を終えた後について、次のように記している。⁵⁾

島子の赤牛は、しょんぼりして木につながれていた。そして、ふとのぞきこむと、腹の下に二ひきのあぶが、ふくれ上がって血をすっていた。島子が、力任せにたたくと、手は、べつとりと赤くそまった。

男たちが、ぞろぞろと外へ出てきた。酒は、ほんの一ぱいずつで売り切れたらしかった。島子はのび上がって、牛のおでこやのどの辺りをかいてやった。「おけちゃん」は、目を細

くして、首を差しのべている。

「ええか、無理するなや。春になって帰ってきたら、また、堤防の草を食べに連れてったるよってにな。」

母牛は、不意に、黒い冷たい鼻面を、鳥子の口の辺りにおしつけた。

鳥子の目には、母牛の姿が「しょんぼりして木につながれて」いるように思えたのである。母牛の腹の下で、二匹の蛇が体全体を膨れ上がらせて血を吸い続けているにもかかわらず、母牛は追い払おうともしていない。母牛は、為れるがままになっているのである。本文中のこの母牛の描写からは、小さなことには動じない母牛の姿ではなく、鳥子と半ば強制的に引き離されてしまったことで、「しょんぼり」と何かを諦めてしまったかのような母牛の姿が見て取れる。

山行きの牛たちには、冬の間も苛酷な重労働が待ち構えている。そのことを母牛も鳥子も十二分に認識している。だからこそ鳥子は、「ええか、無理するなや。」と言って、おでこや喉の辺りを搔いてやりながら母牛に語りかけているのである。峠の上に到着してから、為れるがまま身を委ねていた母牛が、自分の意思に基づいて取った行動が「黒い冷たい鼻面を、鳥子の口の辺りにおしつけた」ことであつた。母牛も、冷たい鼻面を口の辺りに押しつけることによって、鳥子に何かを伝えたかったのではないだろうか。

この時の母牛は、おそらく春になって帰ってきたとしても、鼻木入れを終えた子牛はすでに鳥子の家には居ないことを薄々想定していたのではあるまいか。また、寒冷期の山での苛酷な労働に、産後明けの自分自身の体が、耐え得るかどうかさえも分からないことを認識していたに相違ない。つまり、春になったからと言って、鳥子の元へ元気で戻ってくることができる保証はどこにも無いのである。

(2) けらけら笑いに込められた鳥子の思い

鳥子が、「黒い冷たい鼻面」を「口の辺りに押しつけ」られ、母牛のおけかぶりと戯れる場面が存在する。本文では、次のように記している。⁶⁾

母牛は、不意に、黒い冷たい鼻面を、鳥子の口の辺りにおしつけた。鳥子はあわてて、ぺっぺっと、つばをはき散らした。

「こら、ねぶったら、うちかなんがな。」

鳥子がけらけら笑っている時、後ろで北村さんの声がした。

「さあ、ほんならもろていくで。春には、炭だの、くりだの、しいたけを、背中に積んで帰ってもらうでよ。」

鳥子は、小学校四年生に進級した今年の春から毎日、もうかれこれ半年以上も母牛のおけかぶりと子牛のちびの世話を全面的に任せられている。母牛と子牛の親子の世話をしてきた中で、牛からのこのような不意を突く予想外の行為は、これまでも日常生活の中で頻繁に受けていたはずである。そのように考えると、この時の鳥子の慌てぶりや行動は、少々大袈裟な感じを受ける。

不意に鼻面を押しつけてきた母牛の行為を、ふざけた振りをして軽く返すことで、鳥子は近づいてきている別離が深刻にならないようにしていると考ええる。このような鳥子の思いは、次のような言葉にも込められている。「黒い冷たい鼻面を、鳥子の口の辺りにおしつけた」母牛に対して、「こら、ねぶったら、うちかなんがな。」と言って鳥子は、「けらけら笑っている」のである。確かに「こら、ねぶったら、うちかなんがな。」と鳥子は発言しているが、母牛は「黒い冷たい鼻面を」押しつけたのであって、鳥子を「ねぶって（なめて）」はいない。

前述したように母牛のこの行為は、島子の「ええか、無理するなや。」という母牛の体を思いやった優しい語りかけに対する返事をしている行為だと考えるからである。そうした母牛からの返事を島子は、「こら、ねぶったら、うちかなんがな。」と受け、あたかも母牛がじゃれて戯れているかのように受け取れる言葉を敢えて返し、「けらけら笑っている」素振りを見せているのではあるまいか。

また、軽く甲高い「けらけら」という笑い声は、少女の無邪気な笑いとも取れるが、島子のこの笑いは、島子が心奥から母牛との戯れを楽しんでいる笑いではないと考える。なぜなら、峠上の食堂から「男たちが、そろそろと外へ出てきた」時から、島子には母牛との別れの時が刻一刻と迫ってきていることが十二分に認識できているからである。表層的には母牛と戯れ、けらけら笑いながら無邪気な様を装っていても、深層的には背中に全神経を集中させ、北村からの別れの宣告を察知しているのである。

それ故に、一昨年秋から二年ぶりに再会し僅かに会話を交わしただけの北村の声に、しかも背後からの北村の声に、島子は反応することができたのである。これらのことから、島子は、母牛との別離に際し、出来るだけ深刻にならないように、悲しみにくれないように精一杯自分自身の気持ちを抑制していたと考えられる。

悲しい時に笑うという島子の心情は、究極の悲しみそのものである。島子の笑いは、別離に際し、言葉すら出ない、涙すら出ない、あまりの悲しさに笑うことしか出来ない、自分の感情をすべて抑え込んで笑うしかない、という笑いなのである。つまり、間近に迫っている母牛との別離は、島子にとって究極の悲しみであり、それほどまでに島子は、母牛に深い愛情を感じていたことが分かるのである。

Ⅲ. 母牛の涙と島子の後悔

(1) 「牛が泣く」ということ

島子は、もう鼻を押し付けとはしない母牛に、自分から頬づりをするために両手を添え、「さよなら」を告げている。母牛と別れることは辛いけれど、たった一人で母牛を送り届けることが出来た、さらに、母牛との別れの覚悟を決め、自分から「さよなら」を言うことが出来たことで、肩の荷が下り少し安堵している島子を感じることができる。

本文では、この場面を次のように記している。⁷⁾

両手を放して、何気なく牛の顔を見た島子は、思わずつきとばされたようによろめいた。牛は、目にいっぱいのみだをためて、真っすぐに自分を見ていたのだ。気のせいではなかった。こぼれていくのみだが、赤毛の上をほろほろと伝わった。目がしらの下の毛が、黒くにじんんでいる。牛は泣いていた。

島子の目の前が、さあっと白くほやけた。島子もまた、ほろほろのみだをこぼした。母牛を連れてきたことを、島子は、今になって激しくくやんだ。くちびるをかみしめてもかみしめても、のみだがしたたり落ちた。

別れの挨拶を終え、何気なく母牛の顔に視線を向けた島子に対し、母牛は、「真っすぐに」島子を見つめていたのである。しかも、母牛は、瞳に「いっぱいのみだをためて」いたのである。

作者である川村たかしは、「牛が泣く」ということについて、次のように述べている。⁸⁾

その一つに牛は泣く。ほろほろと涙をこぼす時、目の下の毛がじんわりと濡れて、気がつ

いたこちら側の衝撃は大きかった。ぼくにとって泣くことに出会った時から、牛は離れ難いものとなった。吐く息は黒砂糖のように甘く、瞳の藍色はマスカットに似て深かった。こうして一よほどの貧農でない限り一戸に一頭がいた一どの家でも家族としてのつながりが生まれた。子牛が成長して売られて行く時、母牛は涙を流し絶叫しつづける。同時に、これまでめんどろを見てきた人間の方も、たまりかねて涙をこぼした。

ここに述べられているのは、川村自身の原体験である。川村は、牛が「泣くことに出会った時から、牛は離れ難いものとなった」として、牛の存在が自らの作品のモチーフの一つになったと述懐している。川村は、牛が泣くのは子牛が成長して売られていく時、つまり母牛と子牛の別れの時に「母牛は涙を流して絶叫しつづける」と証言している。

浮橋は、「牛が泣く」ということについて、次のように述べている。⁹⁾

六年生の教室で、この部分について、「(肉体的な痛みなどでなくても)牛が涙をこぼすものだろうか」という疑問が出た。それはそもそも牛には感情などあるまい、という前提からの発言であった。」—そして、(例によって)物語だから、「泣いていた」と強調して書いたまでだ、といったような意見も出た。牛が涙を流した場面など見たことがないし、そもそも牛そのものを見たことさえない、という。(牛が事実として涙を流すかどうかは、本質的な議論ではないにしても、実際、牛は感情的に涙を流すことがあるそうである。)

その場で牛が涙を流すかどうかを確かめるよすがはないにしても、この文章は、その描写の克明さにおいて、文体のきびしさ・はげしさにおいて、確かに「牛は泣いていた」という表現の真実感を強烈に訴えている。子どもがこの作品から受けとるべきものは、「泣くだろうか」といった問題でなくて、「牛が泣くのか!」といった感動を伴った発見であるはずである。この作品の文脈は、確かに、生まれたばかりの子牛を残して山の苛酷な労働に連れて来られた牛は、間違いなく涙を流すに違いないことを教えている。

ここで浮橋は、「この文章は、その描写の克明さにおいて、文体のきびしさ・はげしさにおいて、確かに『牛は泣いていた』という表現の真実感を強烈に訴えている」と捉えている。本文中に描かれている牛が泣くという光景が、事実であるか否かを確かめる必要はないのである。牛が泣くという描写だけに注目するのではなく、作品全体の文脈から考えても「生まれたばかりの子牛を残して山の苛酷な労働に連れて来られた牛は、間違いなく涙を流すに違いない」と感じることができるからである。

(2) 母牛の涙

さらに浮橋は、島子との別れの場面での母牛の涙について、次のように述べている。¹⁰⁾

ここまで連れて来られた母牛が、「目にいっぱいのみだをためて、真っすぐに」島子を見つめている、「牛は泣いていた」という事実が、島子を打ち、読み手を打つのだが、それは、「目にいっぱいのみだ」や「目がしらの下の毛が、黒くにじんんでいる」という、母牛の描写の哀れさが、島子や読み手の胸を打つのではない。牛であるがゆえに、〈だまって〉、「目にいっぱいのみだをためて」飼い主を「真っすぐに……見てい」るだけという行動の、その奥に秘められているもの—母牛の〈表明することのできない〉思いが、〈表明されないままに〉、島子と読み手に、じかに訴えられ、伝わってくるためである。

だから、島子は、(母牛の〈表明することのできない〉思いをじかにとらえ得たがゆえに)、「ぼろぼろとなみだをこぼし」「母牛を連れてきたことを……今になって激しくくやんだ」のである。「なみだ」の描写が、母牛と島子と、たいへん似ていることに注目したい。“痛恨の

共有”を暗示する表現である。

島子が「今になって激しくくや」むのは、母牛が、どんなに子牛と別れたくなかったか、別れて山の村に連れて来られることが、どんなにつらく悲しいものであったかを、「今になって」一瞬に理解したからである。平地の村の自分の家から出てくる時に、子牛の鳴き声に対して、「母牛がいちいち返事をし、後ろを振り返った」こと、島子・じいさん・母さんの三人の力で押し上げた結果、やっと「しぶしぶ、土手の上の道に引きずり上げられた」こと、「耳を立てて子牛の声と一つになって、子どもの声が聞き取れないとき、……引いてもおしても動こうとしなかった」こと、「とっくに子どもの声が聞こえなくなっている、……まだ鳴き続けた」こと—こういった、いかにも子牛と別れがたい気持ちを表していた母牛の心の奥を、一瞬にして照らし出したのが、山の村に連れて来られた時の母牛のなみだであったのである。

浮橋は、母牛が「〈だまって〉、『目にいっぱい』のなみだをためて』飼い主を『真っすぐに……見てい』るだけの行動の、その奥に秘められている」思い、つまり「母牛の〈表明することのできない〉思いが、〈表明されないままに〉」、「じかに訴えられ、伝わってくる」思いを、島子は捉えることができたと考えている。この母牛の「〈表明することのできない〉」思いこそが、「もう鼻をおしつけることはしなかった」という描写から伝わってくる母牛の本当の気持ちであると言える。それは、別れに対する母牛の究極の悲しみなのである。

(3) 「送っていく」から「連れてきた」への意識の転換

ここでは、島子が「今になって激しくくやんだ」ことに着目し考察を進めていきたい。今、この別れの時になって島子が激しく悔やんだことは、何であったのか。それは、「母牛を連れてきたことを」である。しかしながら、山行きを島子自身が決めた時の発言は、「そうや、あしたの山行きは、うちが送っていく。」となっている。つまり、島子の中に、母牛を山へ「送っていく」から母牛を山へ「連れてきた」への意識の転換が認められるのである。

「送っていく」という言語表現からは、山へ行く母牛に、島子の意思とは無関係に、後から付き添っていくような消極的な感じを受ける。その一方で、「連れてきた」という言語表現からは、明らかに島子の積極的な意思を感じ取ることができる。

また、北吉郎も、嫌がる母牛について、次のように述べている。¹¹⁾

主人公の島子は、いやがる母牛を相手の村に引き渡すために連れていくが、涙をためて泣いている牛の目を見て、はげしく後悔する。というのは、島子自身も昨年、「好きで行くのやない」父親の出征に立ち会っているからである。子牛と別れる母牛の悲嘆に、車で父親を見送った自分自身を重ねて、その悲しみに共感し、一体化している島子の心情は、子どもたちに深い感動をよび起こすものと思われる。このときの、母牛に対する島子の愛情について、じっくり読み深めさせたい。

ここで北は、島子の心情が「子牛と別れる母牛の悲嘆に、車で父親を見送った自分自身を重ね」、「その悲しみに共感し、一体化している」と捉えている。島子は、子牛と別れる母牛の姿と、昨年島子と別れて出征せざるを得なかった父親の姿とをオーバーラップさせている。そして、「はげしく後悔する」島子の心情こそが、「母牛に対する島子の愛情」の表れであると考えるのである。

(4) 島子の悔恨

今井正之助は、「牛は泣いていた」について、次のように述べている。¹²⁾

しかし、「牛は泣いていた。」は、語り手の情景描写として、直接、読み手の前に示されているのではない。それは何よりもまず、鳥子の受けた衝撃の表出として存在する。

「……鳥子は、思わずつきとばされたようによろめいた」から「牛は（略）自分を見ていたのだ」と、それまで外にあって鳥子をとらえていた語り手の眼が、鳥子の内に入り、しかも鳥子の眼と一体化していることに注意したい。続く「気のせいではなかった」というのも鳥子の意識である。「気のせいでは」と疑う余地を否定し、涙の伝う具体的情景を、更には涙の伝った跡の黒くにじんだ毛を、とたたみかけるように、視線を一点に吸いよせるように描かれていくのは、外からの語り手の眼を通した情景ではなく、鳥子の眼に、泣いている牛の姿が焼き付けられていく過程なのだ。正確に言えば、鳥子の眼にぴったりはりついた語り手の語りによるそれである。牛の涙が、一つの文章ごとにはげしく鳥子の心を揺さぶっていく。そうしたはてに、動かしようのないものとして「牛は泣いていた」のである。この「牛は泣いていた。」には、〈牛が泣いている〉ことを全身で受け止めている鳥子の姿が刻みつけられている。ここでまず読みとらなくてはならないのは、何よりもそうした鳥子の衝撃であり母牛の心中ではない。

今井は、「牛は泣いていた」ことによって、鳥子は衝撃を受けたと考えている。悲しみでもなく、驚きでもなく、「衝撃」なのである。今井は、母牛の涙が、作品本文の「一つの文章ごとにはげしく鳥子の心を揺さぶっていく」とし、『牛は泣いていた。』には、〈牛が泣いている〉ことを全身で受け止めている鳥子に姿が刻みつけられている」と把握しているのである。

母牛の涙を見て流した鳥子の涙は、単に母牛に同調した涙では決してない。この時の鳥子は、「くちびるをかみしめ」て、涙を堪えようと必死に努力しているのである。それなのに鳥子の涙は、「したたり落ち」てくる。鳥子は、何度も何度も唇を噛み締めるのであるが、止める術もないほど、涙は次から次へと滴り落ちるのである。鳥子のこの涙は、深い後悔の念の涙なのである。

浮橋は、母牛の涙を次のように考えている。¹³⁾

私は、この場面は、児童文学のみならず、多くの文学作品の中でも、すぐれた名文の一つだと考えている。

ここで当然のように、私は、「真っすぐに自分（鳥子）を見て」「ほろほろ」と涙を流して泣いている牛の心を、具体的な「ことば」として顕在化させる作業をやらせてみる。けっして「牛はどんな気持ちだったか」という問いではない。「悲しかった。残念だった。」などと答えさせても、ほとんど意味はない。「悲しかった」などの語でくくってしまえないものを求めさせることが、まさに言語の学習である。

牛は人間の言葉がしゃべれない。けれどここで牛は「真っすぐに」鳥子を見て、泣いている。その涙は、確かに何かを訴えているのだ。いったい、何を言いたかったのだろう……。

鳥子は、母牛の涙を見て、「思わずつきとばされたようによろめき」、大きな衝撃を受ける。そして後悔の涙を流す。我が子である子牛と別れる時ですら涙を流さなかった母牛が、鳥子を見て泣いているのである。山行きの出立の際、母牛が涙を流さなかったのは、親として子牛に心配を掛けたくない、不安を抱かせたくないという気持ちの表れであろうか。置いてきぼりにする者も、置いてきぼりにされる者と同一の辛さを持して別れを迎えたことを、鳥子は十分に理解できたに相違ない。

別れの言葉を話せない母牛は、もう鼻面を押しつけようとはしないことで、鳥子にさよなら

を告げた。それを受け島子も、母牛に「さよなら」という別れの言葉を返した。母牛と島子は、両者とも涙はなく、多くを語らず、取り乱すこともなく、平静を装い、別れの儀式を終えるはずであった。しかし、現実はそのようでは無かったのである。母牛は、瞳にいっぱいの涙をためて真っ直ぐに島子を見つめていたのである。こぼれ落ちていく涙が、赤毛の上をほろほろと伝い、目頭の下毛が黒く滲み、母牛は泣いていた。

島子は、母牛の涙が気のせいではなかったことを確信すると同時に、母牛がこれ程まで自分と同じ位に、あるいはそれ以上に別れを深く悲しんでいたことを知ったのである。島子の「気のせいではなかった」という検証の言語表現の裏には、眼前の母牛の涙が「気のせいであってほしかった」という島子の思いが込められている。

そして、島子が母牛の深い悲しみを知ったように、母牛も島子の深い悲しみに気付いているのである。母牛は、島子がどれだけ自分のことを思っているかを認識している。だからこそ、島子を困らせないように一緒に山へ来たのである。しかし、本当は山へ来たくはなかったし、子牛とも別れたくはなかった。島子は、そんな母牛の心情に気付いたからこそ、「母牛を連れてきたことを」、「今になって激しくくやんだ」のである。この時の島子は、母牛の涙という余りの衝撃の大きさに、我を忘れる程の激しい後悔の念に包まれているのである。

Ⅳ. 島子の躊躇い

(1) 立ち竦む島子

島子が、「北村さんの声で我に返った時、牛はもう、鼻木をとられて」北村と共に、山の村への道を「歩きだして」いた。「北村さんの声で我に返った」ということは、北村に声を掛けられるまでの間、島子は我を忘れて涙を流していたことが分かる。

本文では、母牛と別れた後の島子の様子について、次のように記している。¹⁴⁾

「さあ、帰るとするか。」

辰次郎はんの声がしたが、島子はまだぼんやり立っていた。近所のおかみさんがかたをだきに來た時、島子ははじかれたように、「おけちゃん」の後を追った。

「北村のおっちゃん、あんねえ——まるまるの大根だけはやらんといてなあ。のどにつまって息でけへんのやで。」

曲がりくねって下りていく牛のいちばん後ろで、北村さんが、

「おーっ、分かったぞう。」

と手を挙げるのが見えた。

山行きの牛の送り手側の世話役である辰次郎が、「さあ、帰るとするか。」と、帰路に着くことを皆に告げた際、島子はまだ放心状態のまま「まだぼんやり立って」いた。そんな島子を見かねて、近所のおかみさんが慰めるために島子の肩を抱きに近寄ってきた。この時の島子は、普段から顔なじみの近所のおかみさんでさえも、掛ける言葉が見つからない程、悲しみに打ち拉がれていたであろう。

近所のおかみさんが肩を抱きに來た瞬間、島子は「はじかれたように」、母牛の後を追ったのである。この「はじかれたように」という言語表現は、直前までぼんやりと立ち竦んでいた島子が、熟慮した結果の行動ではなく、衝動的な行動として母牛の後を追ったものと考えられる。

すでに、「さよなら」という別れの挨拶は済んでいるのにも拘わらず、「おけちゃん」の後を

追っていく島子。ここで島子は、母牛である「おけちゃん」の名を呼んではいない。島子が呼びかけたのは、「北村のおっちゃん」なのである。おそらく北村に呼び掛ける最後の言葉になるであろうこの時、島子が口にしたのは、「まるまるの大根だけはやらんといてなあ。のどにつまって息でけへんので。」という言であった。

しかし、母牛は毎年山へ働きに出ており、世話をする北村自身も牛の飼育経験が豊富であり、おけかぶりの扱いには十分馴れているに相違ない。つまり、島子の北村への呼びかけの内容は、すでに分かり切った常識的な事項であり、追いかけてまで敢えて伝えなければならない内容とは考えにくい。それでもこの時の島子は、世話係としての言葉を北村に託すことしかできなかったのである。

(2)「あんねえ——」

ここでは、「おけちゃん」の後を追った島子が、北村の名を呼んだ直後の言葉である「あんねえ」の後の時間的空間について、考察を進めたい。

浮橋は、「あんねえ」の後の間について、次のように述べている。¹⁵⁾

新潟大附属小学校の野村竹秀氏の授業で、ある児童はこの「——」を問題にした。ここには、ことばのつまずきがある。言おうとしたことが言いきれずに、「——」のつまずきのあと、話題をそらしたのだ。本当に言いたいことを言えば涙がこぼれるから——と。

ここで浮橋は、島子の「あんねえ」の後の間には、「ことばのつまずき」が存在すると指摘している。島子は、はじかれたように母牛の後を追ひ、北村の名を呼びながらも、「言おうとしたことが言いきれずに、『——』のつまずきのあと」意識的に話題を逸らしたのである。島子が口にした母牛の世話係としての留意点ではなく、それ以外に、母牛の後を一心に追いかけてまでも言いたかったことが、別に存在したはずである。

今井は、島子が口にした言葉について、次のように述べている。¹⁶⁾

この「北村のおっちゃん。あんねえ——」という呼びかけは、牛の山行きを引きとめようのない、また、それが許されないことをわきまえざるをえない、「人間」としての島子のせめてもの牛への思いやりであった。しかし、この呼びかけのことばは、殆どとりたてて問題にされていないが、いささか唐突である。客観的にみれば、滑稽感すらある。別れのつらさを改めて思い知った島子が我に返り「ぼんやり立って」考えていたことは、こんなことばを口にすることではなかったはずだ。島子の心の中では、出口（ことば）を失った思いがはげしく行きかっている。何かいわなくては、何かしなくては、という衝動が脈絡なく、日頃から念頭にある飼育の際の注意事項となって口をついて出たのだ。この「最後の注意」に島子のやさしさ、牛への思いやりをみるのは勿論誤りではない。しかし、これは言葉の表層、仮の形であって、そこにはほとんど実質の意味はない。

ここで今井は、島子の心の中では「出口（ことば）を失った思いがはげしく行きかっている」と述べる。島子は、最後の発言の機会に「何かいわなくては、何かしなくては、という衝動が脈絡なく」交錯していたのである。

また今井は、島子が口にした言葉について、「言葉の表層、仮の形であって、そこにはほとんど実質の意味はない」と述べている。確かに、島子の北村に呼び掛けた言葉は、牛の世話係としておけかぶりを思いやる発言であると考えてみても、余りにも安易な注意内容であり、長い間牛の世話に携わってきた北村には必要のない言葉であったかもしれない。

しかし、もう後がない最後の機会であろうこの場において、敢えて余り意味のない当たり前

の言葉を口にする事で、一普段接しているおけかぶりに対し、世話係としての言葉をいつも通りに掛けることで、一実は、その言葉の蔭に隠されている、島子が本当に言いたかったことの重みが増すと考える。なぜなら、口にはしていない島子の言葉、そして口には出せなかった島子の言葉には、それだけ思い入れの深いことが隠されているはずなのである。

我を忘れて立ち竦んでいた島子は、子牛と別れて山行きを行き渡る母牛を無理矢理ここまで連れてきてしまったのも、冬の間、苛酷な重労働が待っていることを承知で連れてきてしまったのも、紛れもなく自分自身であるという事実と直面し、激しい後悔に身を落としていたのであろう。さらに、峠の上まで連れてきてしまった以上は、春までの間、自分が母牛の世話をする訳にはいかないことは明らかなのである。だからこそ島子には、春までの間、北村に母牛の「おけかぶり」ことをお願いするしか他に道は無いのである。

今の島子には、休みなしで働きずめのため、最も肥えているべき「腰の辺り」の「骨が出」るほど痩せてしまった母牛が、冬の苛酷な重労働に耐えて無事に戻ってくることを願わずにはいられないのである。

つまり、この願わずにはいられなかったことこそが、島子が本当に言いたかったことであると考え。口には出していない、口には出せなかった島子の言葉には、それだけ思い入れの深い言葉が包み隠されているのである。それは、「おけちゃんを大事にして」、「痩せてしまったおけちゃんをこれ以上扱き使わないで」、「必ず春には元気な体のままで返して」という、おけかぶりの体を思いやり、心から無事を願う言葉だったのである。

【引用文献】

- 1) 拙稿「国語教科書教材基礎研究―「山へ行く牛」の考察を通して―」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第44号、静岡大学教育学部、平成24（2013）年3月、15～25頁
- 2) 川村たかし作「山へ行く牛」『みんなと学ぶ 小学校国語六年・下』、学校図書株式会社、平成15（2005）年7月1日、14～15頁
- 3) 上掲書、15頁
- 4) 前掲2)の文献、15頁
- 5) 前掲2)の文献、16頁
- 6) 前掲2)の文献、16～17頁
- 7) 前掲2)の文献、17～18頁
- 8) 川村たかし稿「『牛』が象徴するもの」、『学図 教科研究国語・小学校編』No.50、学校図書株式会社、昭和58（1983）年2月、3～4頁
- 9) 浮橋康彦稿「文学教育についての私見」、『日本文学』25巻8号、日本文学協会、昭和51（1976）年8月10日、4頁
- 10) 浮橋康彦稿「文学言語の可能性を学ばせる」、『日本文学』26巻3号、日本文学協会、昭和52（1977）年3月10日、11～12頁
- 11) 北吉郎稿「主人公の心情に迫り共感を形成する読みの指導」、『実践国語研究別冊4』、明治図書出版株式会社、昭和60（1985）年8月1日、91～92頁
- 12) 今井正之助稿「〔山へ行く牛〕（川村たかし作）の読み―島子はなぜ牛になったのか―」、『日本文学』33巻6号、日本文学協会、昭和59（1984）年6月10日、53頁
- 13) 浮橋康彦稿「作中人物の『心内語』の創出と『状況』―『山へ行く牛』の授業を中心に―」、

『日文協・国語教育』No.9、日本文学協会、昭和54（1979）年6月、2～3頁

14) 前掲2) の文献、18頁

15) 浮橋康彦著『読む力をつける国語教育』『『山へ行く牛』授業の回想」、明治図書出版株式会社、昭和59（1984）年8月、38頁

16) 前掲10) の文献、55～56頁

A Researching Takashi Kawamura through Japanese Language Teaching Materials “Yama he iku Ushi”

Hiroshi OHTSUKA

(Received October 3, 2013)

Abstract

Takashi KAWAMURA (1931-2010) was born in Nara Prefecture. The first recorded example of his work *Yama he iku Ushi* ran in August 1972 edition of *Nihon Jidou Bungaku*. Later, in April 1956, he had his first work, *Yama he iku Ushi* officially published. A fuller, revised version *Yam he iku ushi* was included.

The main issues examined in the research of Takashi Kawamura, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Yama he iku Ushi* and those in the school textbook version.

The textbook version of *Yama he iku Ushi* was published by Gattkou Tosho Publication in 1977. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 12 years or older. Since 1977, the textbook has been reprinted a number of times.